

中国近代詩論考

陣ノ内宜

陣ノ内宜男著

中国近代詩論考

桜楓社刊

著 者 紹 介

昭和6年 早稲田大学文学部卒業

現 職 早稲田大学教授

(教育学部・大学院文学研究科
において中国語・中国近代文学
講座を担当)

著 書 『中国現代抒情詩』
(桜楓社) その他

中国近代詩論考

検印省略

昭和51年6月1日 印刷

昭和51年6月5日 発行

著 者	じん	うち	よし	お
	陣	ノ	内	宜
発 行 者	及	川	篤	二
印 刷 所	(株)	共 信 社	印 刷 所	

桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町 2-8-13

振 替 東 京 6-18020

T E L (291) 5660~2

3097-760334-0723

中国近代詩論考

目次

I 中国近代詩論考 5

文学革命と白話詩論 5

郭沫若の『女神』について 30

中国近代詩の基調 39

蔣光慈の詩 58

中国現代詩における格律の問題 74

中国近代詩の展望 94

II 五四以後における新詩発展の輪廓 139

Ⅲ 金色の海螺（童話詩）

189

あとがき

I
中国近代詩論考

文学革命と白話詩論

一 文学革命の経過

中国の文学革命は、形式としては「文語を捨てて白話を採れ」ということに始まった。文学革命胎動の初期は政治とは無関係に、欧米の文化的教養を享けた二、三の知識人が、新しい文体と文学の在り方を提唱したにすぎなかったが、民国八年以後、「五四」文化運動の一環として、文学革命が推進されるや、その性格を一変した。内容として収獲したものは、文学革命という称呼にふさわしい、中国文化史上、未曾有の文学価値の変革であり、いうところの「革命」にはずかしからぬ画期的な変革であった。封建の桎梏を脱して、人間としての真実に徹底するために、新しい世界観によるモラルに順応するために、ゆがめられた人間性の苦悩の解放の場として、文学革命は、その荊の道をきり拓いていった。民国の白話詩論が、どういう径路をたどったかを知るためには、その母胎となる文学理論が、どう展開していったかを一応知るべきであるが、紙幅の制限で、今はその詳論をさけて、僅かに一瞥にとどめたい。

複雑な径路をたどった文学革命理論の展開は、筆者の見解に従えば三つの意義に要約される。

第一は、胡適（一八九一—一九六二）が、「八不主義」^①その他で唱えた一連の主張である。新文学の内容に感情と思想を盛るべきことを指摘し、旧文語文学の欠点を残りなくついで、将来の中国文学の文体

として使用すべきものは白話であることを予言したことである。更に胡適は、過去の中国文学史を再検討して、白話文学若しくは白話的要素の多い文学こそが、真に血脈のかよった中国文学の正統であることを論断して、中国文学価値観に大きな反省を与えた。これは先人未踏の創見であり、まさしく中国における「文学の開眼」であった。

第二には、胡適の文学革命に呼応して起こった陳独秀（一八七九—一九四二）の「文学革命論」⁽³⁾における主張である。それは抒情的な国民文学、真面目な写実文学、通俗的な社会文学の建設を提唱して、新文学の方向に明確な指針を与えたことである。劉半農（一八九一—一九三四）、錢玄洞（一八八七—一九三九）なども、胡適、陳独秀に声援を送ったことにおいて功績を残している。

第三は、周作人（一八八五—一九六六）の文学観である。⁽⁶⁾周作人は、儒教、道教にもとづく一切の文学を非人間性の文学として排斥した。胡適にあっては、『水滸伝』、『西遊記』などは旧白話文学の遺産として尊重したが、周作人は一步をすすめて、これらも非人間性の文学として葬り去り、個人主義的、人間本位主義の文学のうちのみ、真の人間の姿は描かるべきだと主張した。文学とモラルについて新しい解釈をくだし、ここに「人間の発見」についての啓示を行なった。さきにあげた、胡適の「文学の開眼」とこの周作人の「人間の発見」の二つが基調となつて、文学革命は逞しい成長と発展を遂げたのである。この二つの基調を創作に実行して新白話文学創作の第一声をあげた者が、魯迅であることは周知のとおりである。

新しい白話詩論の基調は、文学革命理論の展開のうちからたどるべきであるが、これについては、すでに解説、翻訳なども世に行なわれているので、ここでは専ら今なお未紹介である白話詩の理論の

展開をみてゆくこととする。

注 (1) 八不主義は民国五年 (一九一六) 一〇月「新青年二ノ二」に発表された「寄陳独秀」並びに民国

六年一月「新青年二ノ五」に発表された「文学改良芻議」の論旨

(2) 「建設的文学革命論」民国七年 (一九一七) 四月「新青年四ノ四」に発表、胡適の文学理論の中心をなす論文

(3) 民国六年二月「新青年二ノ六」

(4) 民国六年五月「新青年三ノ三」

(5) 民国七年一月「新青年四ノ一」

(6) 民国七年一二月「新青年五ノ六」に発表した「人的文学」

以上の諸文献はすべて、『中国新文学大系』の「建設理論集」並びに「文学論争集」中に収録されている。

二 白話詩の概念

白話詩の概念を説く前に、現代白話詩のサンプルを示しておくことが、いっそうその理解を深めると思うので左に一つを示そう。

筆立山頭展望

郭沫若

筆立山在日本門司市西。登山一望，海陸船塵，瞭如指導。

大都會的脈搏哟！

生的鼓動哟！

打着在，吹着在，叫着在，…

噴着在，飛着在，跳着在，…

四面的天郊煙幕蒙籠了！

我的心臟呀，快要跳出口來了！

哦哦，山岳發波濤，瓦屋的波濤，

湧着在，湧着在，湧着在，湧着在呀！

万賴共嘆的 *Symphony*

自然与人生的婚礼呀！

彎彎的海岸好像 *Cupid* 的弓弩呀！

人的生命便是箭，正在海上放射呀！

黑沉沉的海灣，停泊着的輪船，進行着的輪船，數不尽的輪船，

一枝枝的煙筒都開着了朵黑色的牡丹呀！

哦哦，二十世紀的名花！

近代文明的嚴母呀！（一九二〇年六月間作）

さて民国初頭、文学革命の最初の提唱をなした胡適は、その論文「談新詩」（一九一九、一〇 星期評論）のなかで、中国の韻文の歴史を左のとおり区分している。

第一次の開放は詩經の風謠体を長詩体とした楚辭の屈原である。第二次の解放は漢代以後にお

いて、五、七言の古詩の虚字を廢して、孔雀東南飛、木蘭詩を産んだ時期。第三次の解放は唐、五代に盛行した小詞。第四次の解放は民国になってから生まれた白話詩がこれで、第四次に至って初めて中国の韻文は意識的に解放された。

白話詩という事新しく聞こえるが、その実、白話詩は民国になってから初めて姿を現わしたものではない。古くから中国に存在していたものであるが、胡適に発見されて初めて脚光を浴び、その正しい評価がなされたのである。『胡適の画期的な名著というべき『白話文学史(上)』(民国一七年六月)によれば、彼は白話詩の解釈を極めて広範囲に説いている。

胡適は言う。『詩経』の国風は周代の白話詩である。漢代における定律の詩以外の民歌はすべて白話詩である(例、郊祀歌)。更に胡適は白話詩をも含めた中国文学全般に関して、左のような論断をくだしている。

中国の文学は漢代以後二つの道を歩いている。一つは模倣をこととした生氣のない文語文学である。今一つは自然にして活潑な人生を表現する白話文学である。従来の文学史は單に前者のみを認めて、後者を忘れてゐる。(前掲『白話文学史(上)』)

更に錢玄同(一八八七—一九三九)も『嘗試集』(民国九年出版、胡適の白話詩集)の序文において、白話詩について左のとおり述べている。

従来白話で韻文を作った者は少なくない。詩経、楚辞はその当時の白話詩である。両漢以後文章は民賊文妖の弄ぶところとなったが、ものわかりのよい人々はやはりいて、白話の韻文は盛行した。かの漢魏の樂府、歌行、白居易の新樂府、宋人の詞、元明人の曲はすべて白話の韻文であ

る。陶潜の詩は白話ではないが、言語の自然によく適合している。またかの宋明人の詩のなかにも白話を用いて作ったものがある。これらをみると、中国においては、白話を用いて韻文をつくることは極めて平常のことであった。

さてここで、白話という言葉の概念について一考してみたい。胡適『白話文学史(上)』によれば、“白”とは舞台上の白(セリフ)の白であり、“清白”の白であり、粉飾を加えぬ言葉、“明白”の白で、わかりよい言葉と解説している。すなわち一言にしていえば、日常会話の言葉、話し言葉、口語のことである。したがって白話詩を口語詩であるとすれば、胡適、錢玄同などの指摘したように、周代にも、漢代にも唐代にも、白話詩は存在したという論断に耳を傾けないわけにはゆかないであろう。最初に一言したように、僅か三〇年前、“文学革命”という未曾有な中国文学の価値観の变革は正によって、中国文学の評価、鑑賞は、根本的に改められてきている。殊に胡適が、中国における韻文の第四次の解放として、現代白話詩をあげ、新白話詩の創作で、初めて中国の詩は意識的に解放されたと論断したところに、大きな問題がひそんでいる。

その民国初期の白話詩論が如何にして展開したか、その詩論の発展の足跡をたどり、推移をみてゆくのが、この小論の骨子である。

三 民国白話詩論の展開

清末の詩の改革

清末において、夏曾佑(一八六一—一九二四)、譚嗣同(一八六五—一八九八)などが、詩の改革に志した。

この兩人は共に梁啓超（一八七三—一九二九）の同志で民権論の主唱者であるが、傍ら旧詩に満足せず、詩作に工夫を加えようとした。しかし彼らの試作は単に新名詞を詩句に挿入する程度に止って、別に新しい境地を拓いてはいない。ついで黄遵憲（一八四八—一九〇五）もやはり、俗語を用いて作詩を試み、詩句に新思想や新名詞を盛りこもうと試みた。黄遵憲の『日本雜事詩』（光緒五年）は明治初年における日本來遊の見聞を詠んだものであるが、詩句のうちに「人間」「美少年」「新聞」「淡巴菰」「斷髮」などの新名詞を盛んに用いてはいるが、これは七言の旧形式に新名詞挿入の化粧をちょっと施した程度であって、いわゆる民国の白話詩とは、その文学精神において、全く異質のものである。ただし、これら三人の作詩における新しい試みが、民国の白話詩運動に対して、若干の觀念上の影響を与えたであろうことは想像される。

民国初期の白話詩論

文献に徴すると、最も古いものでは劉半農（一八九一—一九三四）の「詩と小説の精神上の革新」（一九一七・七「新青年」三ノ五）が注目すべき最初のものである。この論文は小説論と詩論の兩部分からなっているが、いま詩に関する方面の論旨を要約する。

中国の詩の歴史のうちで、もっとも優れたものを求めれば、それは詩經の「国風」である。後世の詩人にはその靈魂のうちに一つの「真」字もない。現在では眞の詩が亡んでしまつて、偽詩ばかりである。国風こそは、中国の眞の詩の姿を伝えるものであり、「変雅」にも若干の価値がある。後世には陶淵明と白香山の二人のみが眞正の詩人といふべきみである。孔子は三千篇のう

ちから僅に三百十一篇を選んだ。例のきわめて不確実な「思無邪」の眼光で、その他の絶妙なる国風的なものを一様に抹消したことは、中国文学史上の最大の罪人である。

現代は偽詩横行之時代であり、専ら声調、格律を講じ、平仄のみに捉われて成句を作り、山林、村野の詩、懷旧、送別のみにうき身をやつしている。

詩の精神上の革新は、実に「旧に復する」ことにかかっている。時代に古今、物に新旧の差はあるが、詩の「真」は唯一無二のもので、決して時代によって変化左右されるものではない。

ここで、英国のサムウェル・ジョンソン（一七〇九—一七八四）の詩についての見解を詳細に解説している。ジョンソンのラッセラス（*Rasselas*）から汲み取った劉半農の詩論の骨子は次のようなものである。

詩は天然の贈物であり、上天が人類に賜ったものである。古人は詩を作る場合、自然界を捫りどころとしたが、後人はただ技法のみにとらわれた。古人の心中には魄力と創造力があつたが、後人はただ装飾と模倣とをこととした。自然のありのままの姿を学ぶことが、詩人の眼を肥やすゆえんである。心に藏している自然界の無数の印象のうち、最も重要なものを選び、そのうちから最も人に感動を与えるものを取り出して、人々に示すならば、心中恍然として、宇宙の真諦に合わせしめることが出来るであらう。詩人たるもの人生現象に習熟しなくてはならぬ。種々の社会、人間の哀歓を精密に調査して、その実量を計らなくてはならない。詩人は各種の言語、科学を修得しなくてはならぬ。詩格は高尚で、それを思想と調和せしめなくてはならぬ。措詞は妥当に、音調は調和あらしめ、特に実習を怠らず、その練熟を求めなければならない。